

平成二十五年四月二十七日(土)

第四三八回 史跡めぐり

「逆川探検」

逆川緑道を歩く

NPO 法人 越谷市郷土研究会

参考資料

- ・「郷土研究会資料」
- ・「越谷市の文化財」
- ・「越谷の歴史物語」
- ・「越谷ふるさと散歩」
- ・「わたしたちの郷土」しがや
- ・その他
- ・各説明版・各碑文

郷土研究会

越谷市教育委員会

同 同 同

バス時刻表

バス停「新方橋」北越駅行き

12:00	5	7	14	20	33	34	42	46	58
13:00	1	14	16	22	36	40	48	53	

コ ー ス

越谷市市民会館スタート（約7キロ）

- 1 ポケットパーク
- 2 瓦曾根溜井
- 3 寺橋
- 4 建長板碑
- 5 越ヶ谷御殿跡
- 6 伏越（元荒川）
- 7 地蔵橋地蔵尊
- 8 キャンベルタウン公園
- 9 伏越（新芳川）
- 10 水神様
- 11 大吉調整池
- 12 松伏溜井
- 13 増林河岸場跡

自由解散 約12時半

（各自北越谷駅行バス利用）

第四三八回 史跡めぐり

「逆川探検」

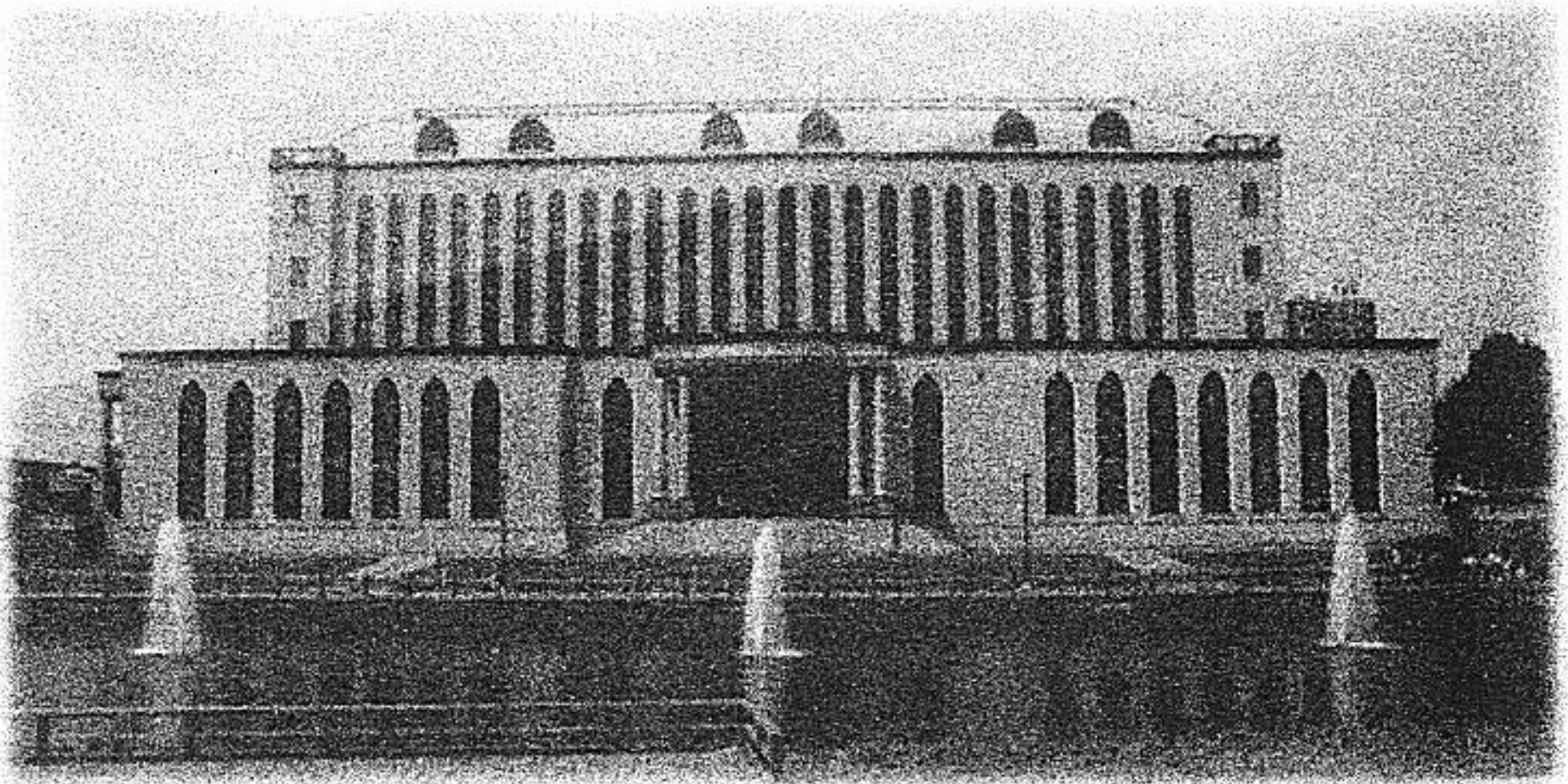
逆川緑道を歩く

● 日時 平成二十五年四月二十七日（土）

● 集合 午前八時三十分 越谷市中央市民会館（越谷市役所前）

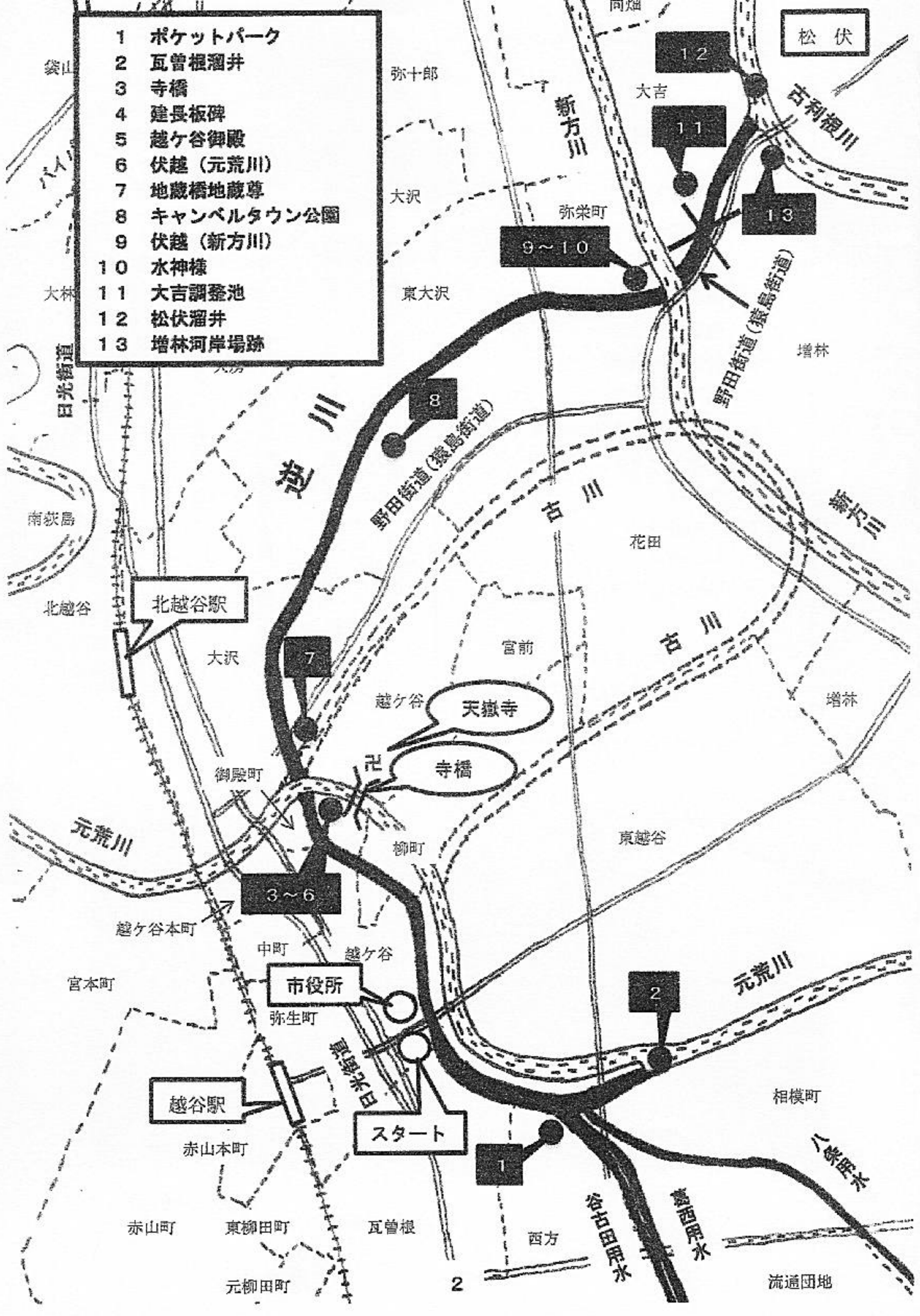
● 参加費 五〇〇円（資料代・保険料など）

● 案内者 常任理事 篠原陸郎 ・ 理事 山口正夫



越谷市中央市民会館

- 1 ポケットパーク
- 2 瓦曾根溜井
- 3 寺橋
- 4 建長板碑
- 5 越ヶ谷御殿
- 6 伏越 (元荒川)
- 7 地蔵橋地蔵尊
- 8 キャンベルタウン公園
- 9 伏越 (新方川)
- 10 水神様
- 11 大吉調整池
- 12 松伏溜井
- 13 増林河岸場跡



1 ポケットパーク (谷古田取水口公園)

●谷古田取水公園

完成 平成二十四年三月

工事金額 約四千五百万円

発注者 埼玉県春日部農林振興センター

道路際 植木 マテバシイ 草 ヒメイワダレソウ

●用水のはじまり

谷古田用水は、延宝八年(一六八〇)に開削された農業用水で、その名前は、谷古田領(三十一村の現草加市と六村の現川口市)に由来する。当時、越谷から草加にかけては湿潤地で、安定的に米作りを行える環境を整え、治水を行うためには農業用水の整備は重要な公共事業の一つであった。通水は四月二十六日から八月三十一日

●用水の長さ

当時の用水の延長距離は、約6、220mあったと記録されており、越谷地域では、三村にまたがることから「さんが(さんがわ)」、草加地域では五村にまたがることから「五ヶ村用水」とよばれていた。また、水路幅は約2、7mあり、豊富な水量と広範な受益面積から基幹的な農業用水として機能を果たしていた。

●現在の役割

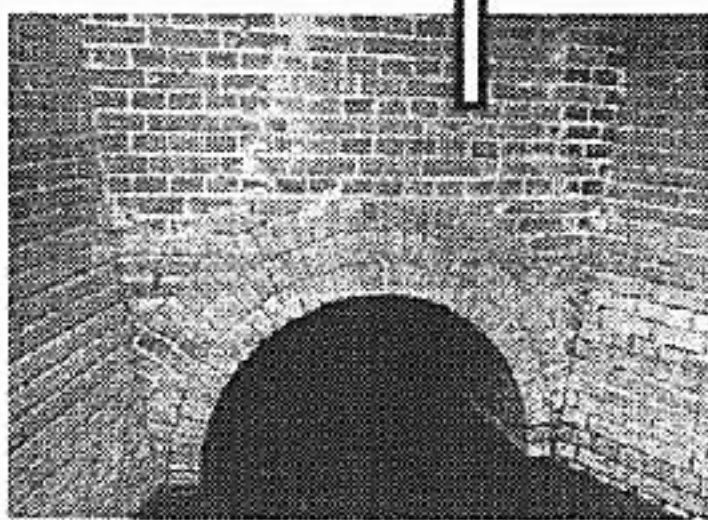
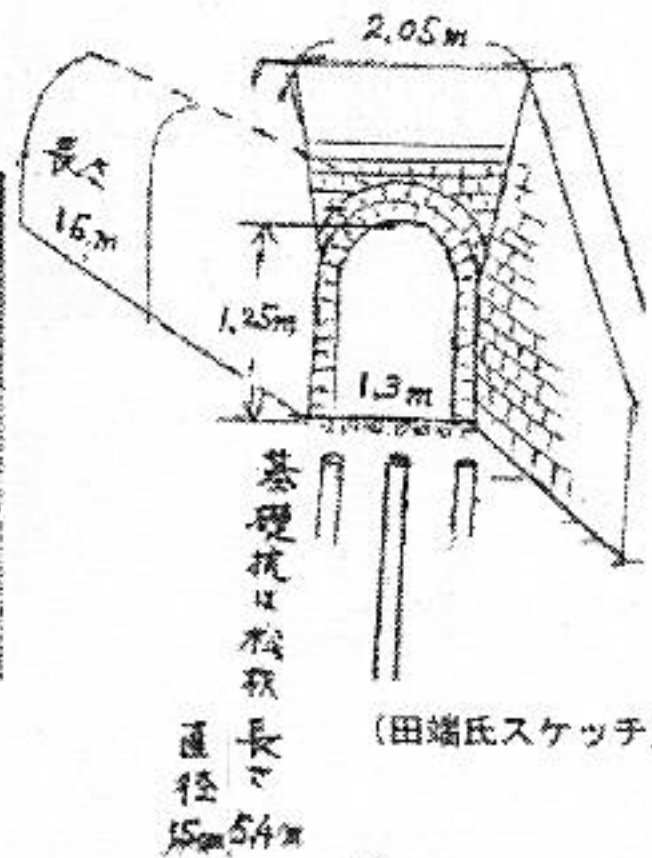
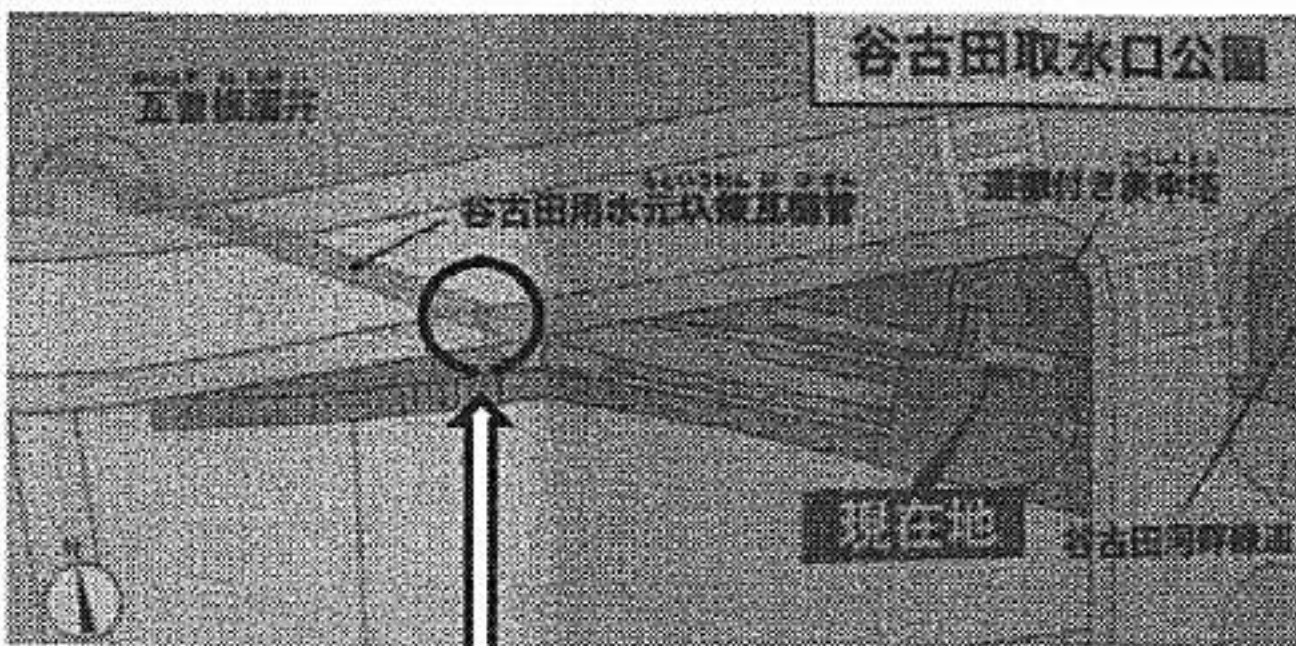
谷古田用水は、現在でも農業用水としての役割を担い、草加市の八幡町・中根町方面の田んぼに農業用水を送っている。越谷市で

は、農業用水として谷古田用水を利用している田んぼはないが、用水路敷を利用して、昭和63年度からこの公園を起点とした「谷古田河畔緑道」(遊歩道3、8*)を整備し、市民に利用されている。

●現存日本最古の煉瓦造り樋管

完成 明治二十四年(一八九二)

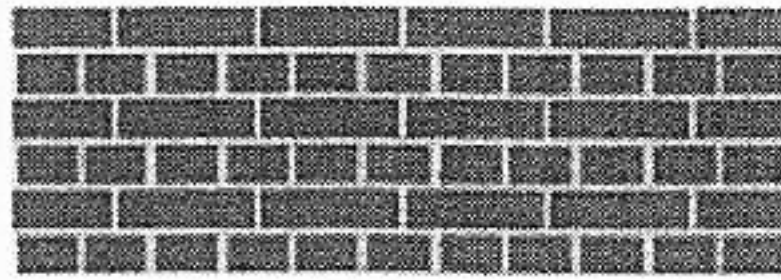
現存する農業用水の取水施設の煉瓦造樋管では日本最古である。煉瓦積みはイギリス積み。



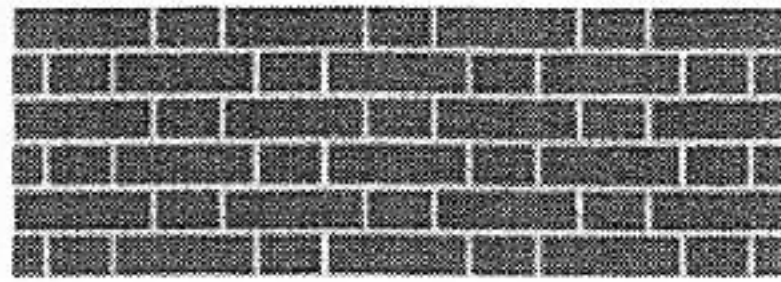
●煉瓦積みについて

煉瓦積みにはイギリス積み・フランス積み・長手積み・小口積みがある。

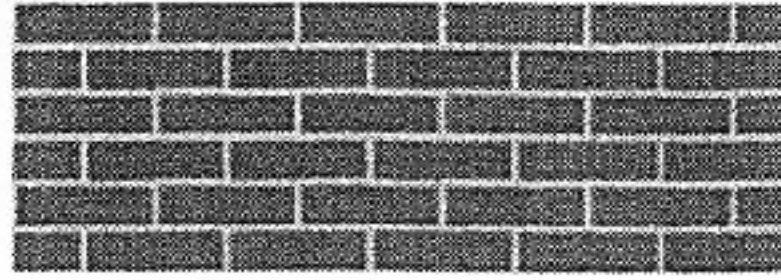
イギリス積み



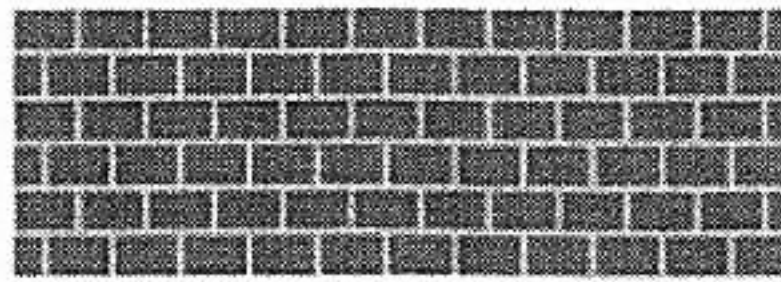
フランス積み



長手積み



小口積み

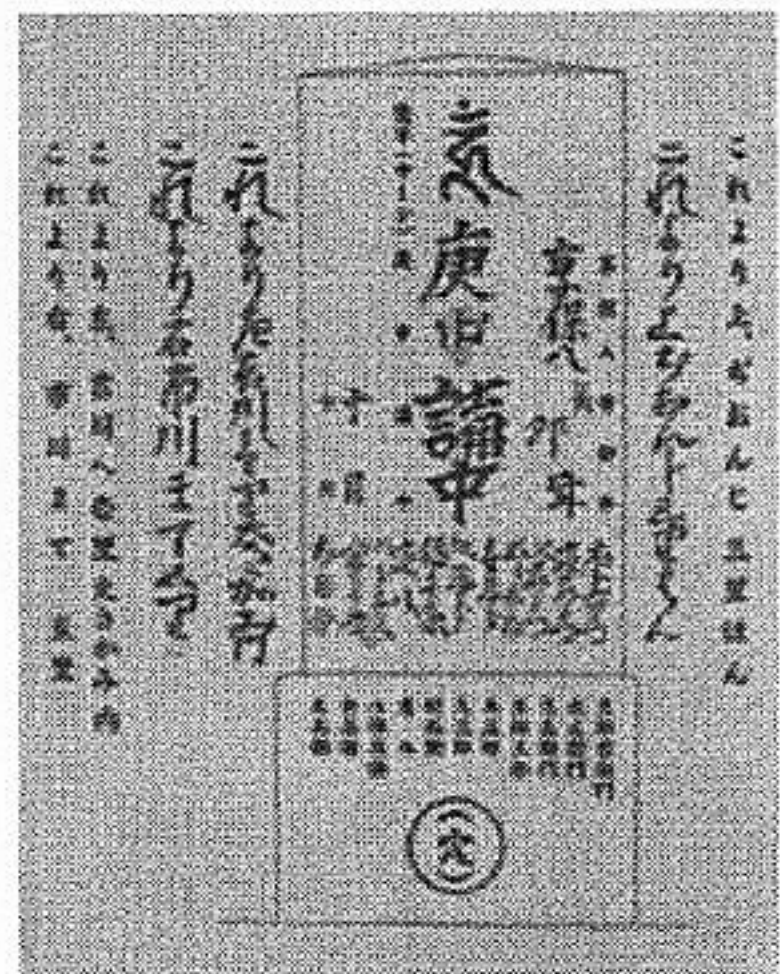


●煉瓦工場が多かった越谷

越谷市はかつて県内有数の煉瓦生産地帯であった。明治から大正期にかけて、元荒川・古利根川の流域にかけて数多くの煉瓦工場が存在していた。両河川流域に豊富な氾濫土があったことと、舟運に適していたことが理由と思われる。

明治三十二年増林村で操業した上田煉瓦工場が最初といわれている。

●道標付き庚申塔



慈恩寺
現さいたま市岩槻区
大さかみ
現越谷市大相模の不動尊
市川
現千葉県市川市
梵字ウー
青面金剛
庚申様

●瓦曾根溜井防水碑

碑文 前島密の書体

前島密 II 日本の近代郵便制度の創始者・一円切手の肖像

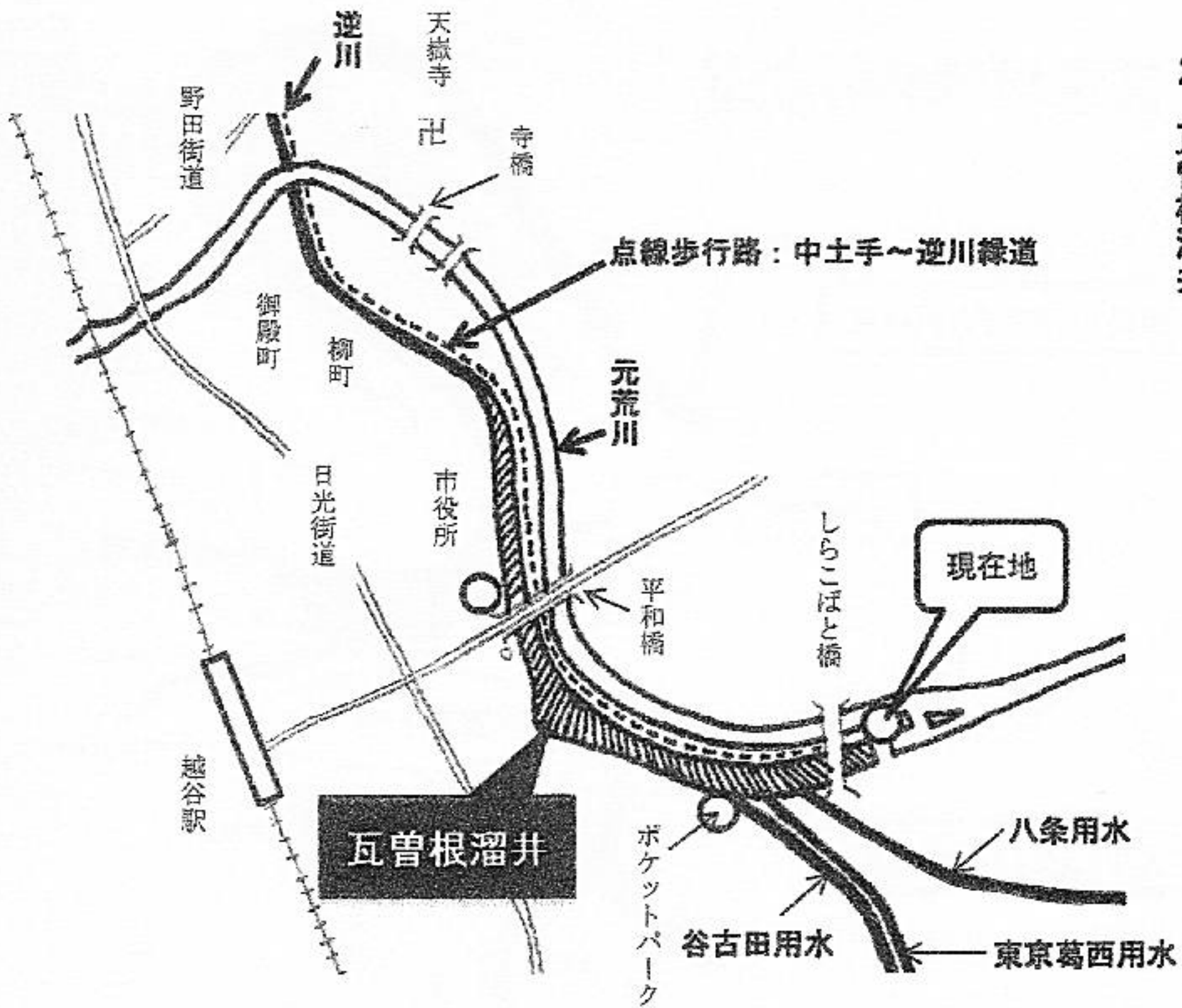
葛西用水の恩恵に授かっている下流の村々は、溜井が洪水で溢れそうになった時は、協力して防水にとめた。

明治二十三年(一八九〇)八月二十三日の利根川が決壊にいたり、葛西用水に洪水が流れ込み、八月二十五日に溜井の水位が増し、今にも溢れそうになった。

このため、現在の越谷市は勿論、草加市・八潮市・足立区・葛飾区の葛西用水を利用して農民たちが一丸となり、これを防ぐことが出来た。この碑はその時の記念碑である。

この時に防水を援助した「東京府葛西淵江領有志者」との文字が見られる。

2 かわらそねためい
瓦曾根溜井



●瓦曾根溜井・瓦曾根堰の譜

・この溜井は慶長一九年（一六一四）、徳川幕府が八条領と四ヶ村（瓦曾根・西方・登戸・蒲生）の地域の水田用水として利用するため荒川の流れをこの地で堰き止め溜井としたことが始まりで、その貯水旅は二〇ヘクタール余に及んだ。この時は、荒川の流水を利用していたが寛永六年（一六二九）に幕府の治水対策で荒川の西遷が行われると元荒川となり、流水が激減し、溜井が枯渇した。そこで、寛永七年（一六三〇）、水源を庄内領中島の利根川（現在の江戸川）に求め、用水路を開削して古利根川に導入し、松伏堰で堰止めて溜井とし、寛永十八年（一六四一）頃、逆川（鷺後用水）によって元荒川に接続し瓦曾根溜井に送水した。

・この中島用水も宝永元年（一七〇四）の大洪水によって庄内領内水路が埋没してしまつたため、享保四年（一七一九）に利根川の川俣の幸手領用水以樋を増設して、琵琶溜井を通して古利根川に水を入れ、瓦曾根溜井に導入するなど、この溜井の幾多の変遷を経ながら下流村々の用水源として利用された。

・大正十三年これまでの石堰を廃止し、鉄筋コンクリート造り鋼製水門（一〇門）に作り替えられ、錆止め塗装の色の赤から赤水門と称した。

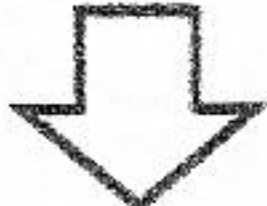
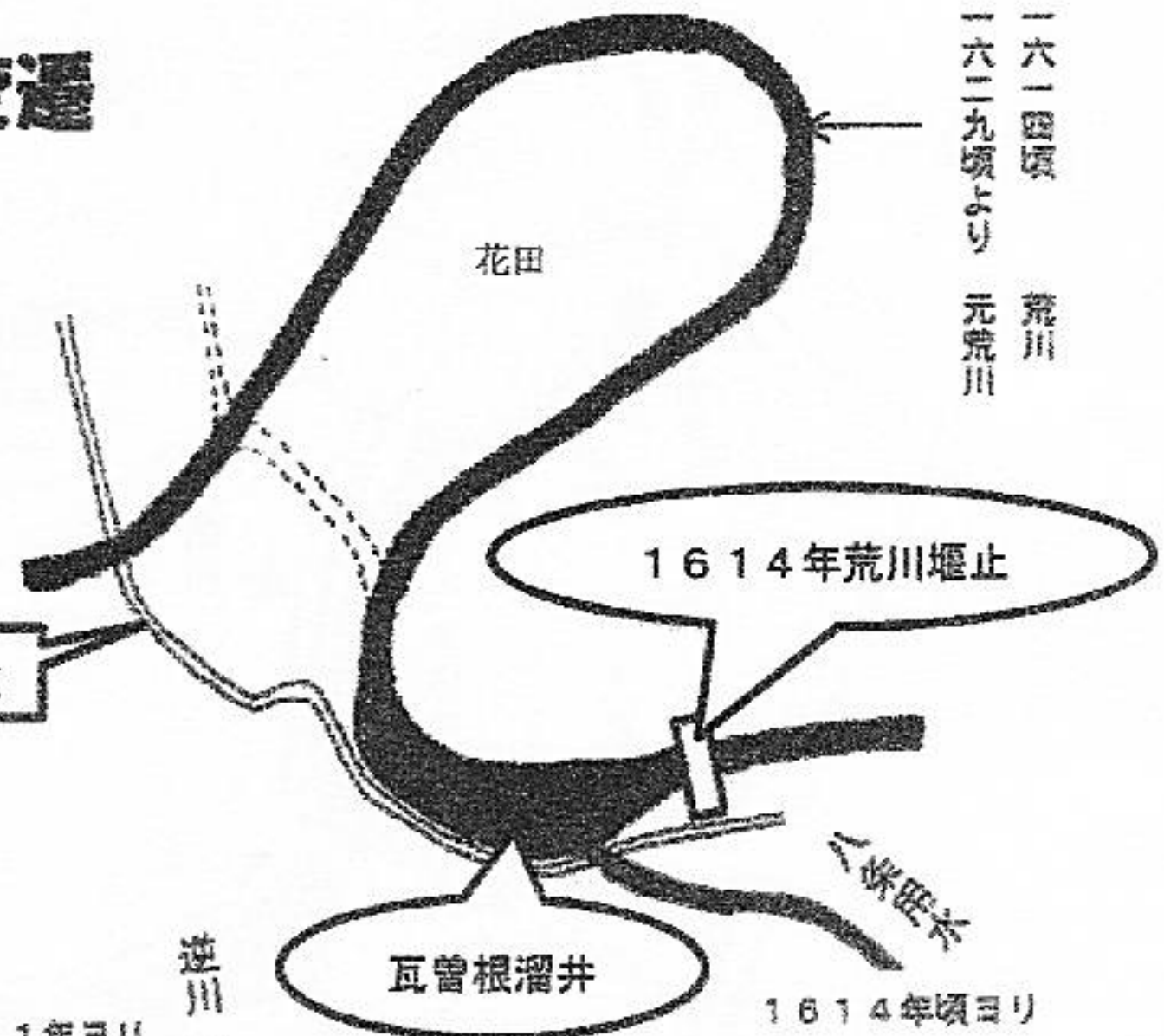
・昭和四一年、元荒川上流（末田須賀堰）の排水不良等により、逆川を元荒川の下をくぐらせ（伏越）、元荒川と用排水を分離し、溜井の規模も縮小した。

・平成九年、下流地盤沈下対策から旧堰を取り壊し、現在の新堰二門を造成した。

瓦曾根溜井の変遷

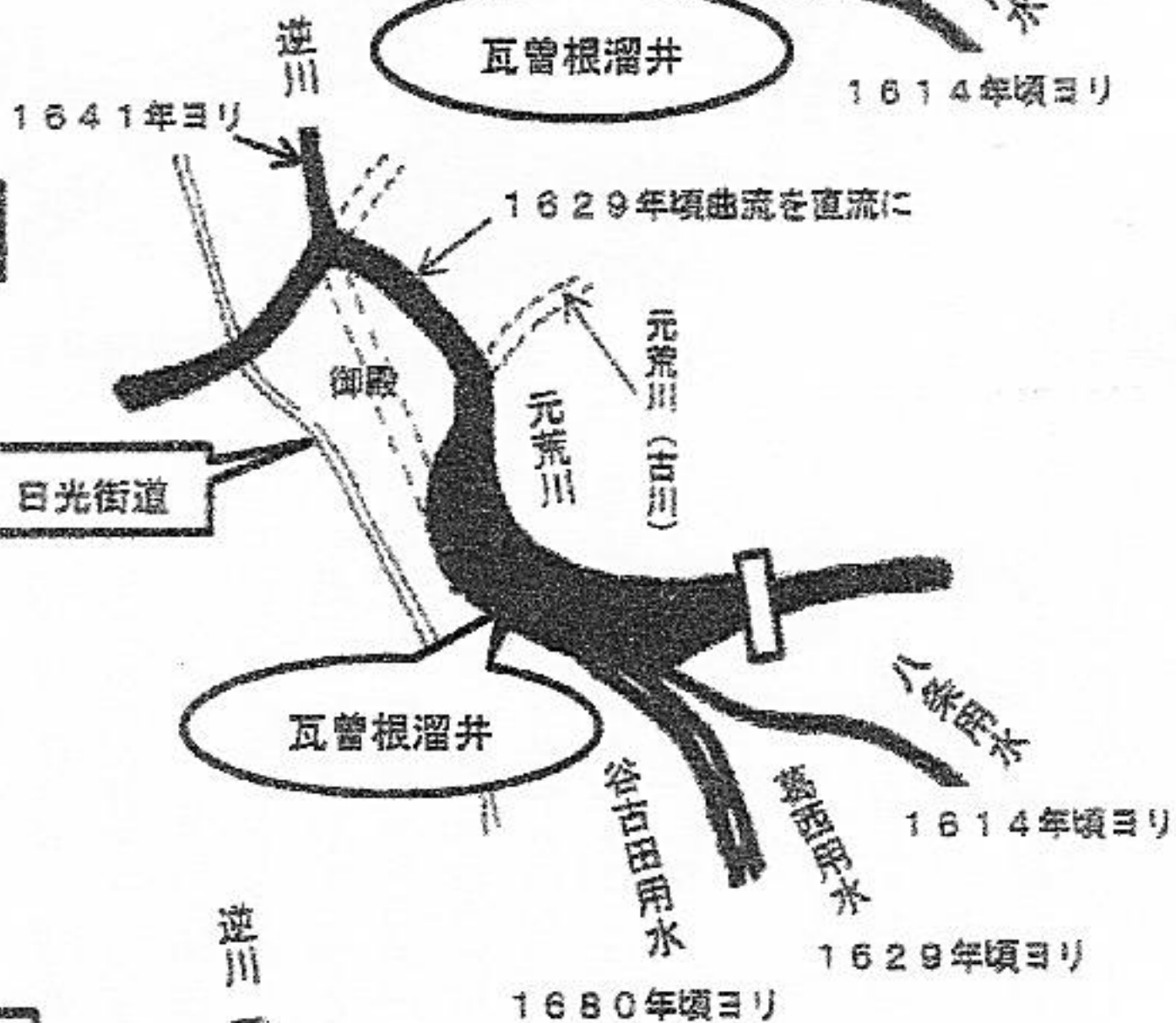
慶長19年(1614)頃

日光街道



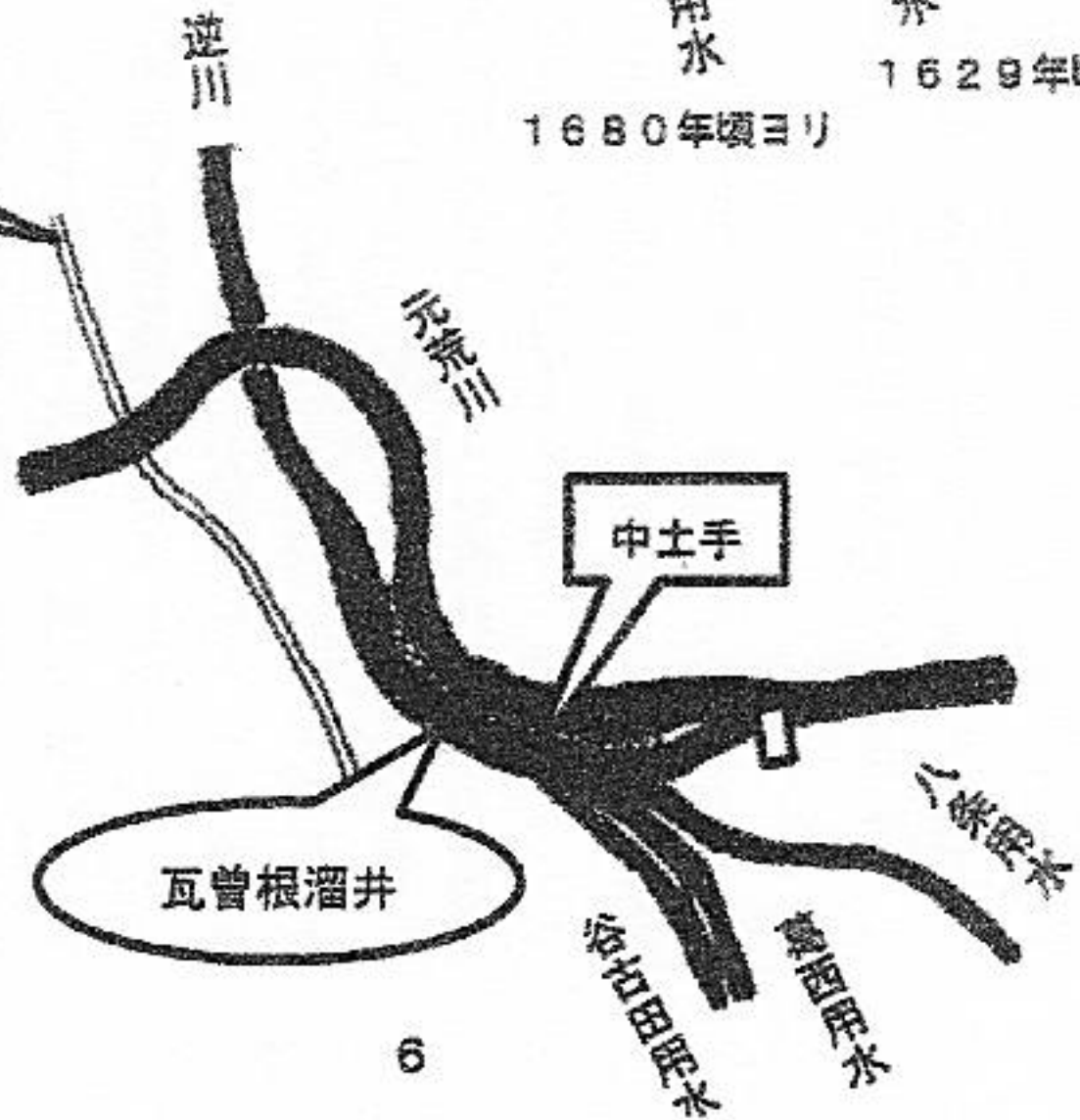
寛永18年(1641)頃

日光街道



昭和41年(1966)頃

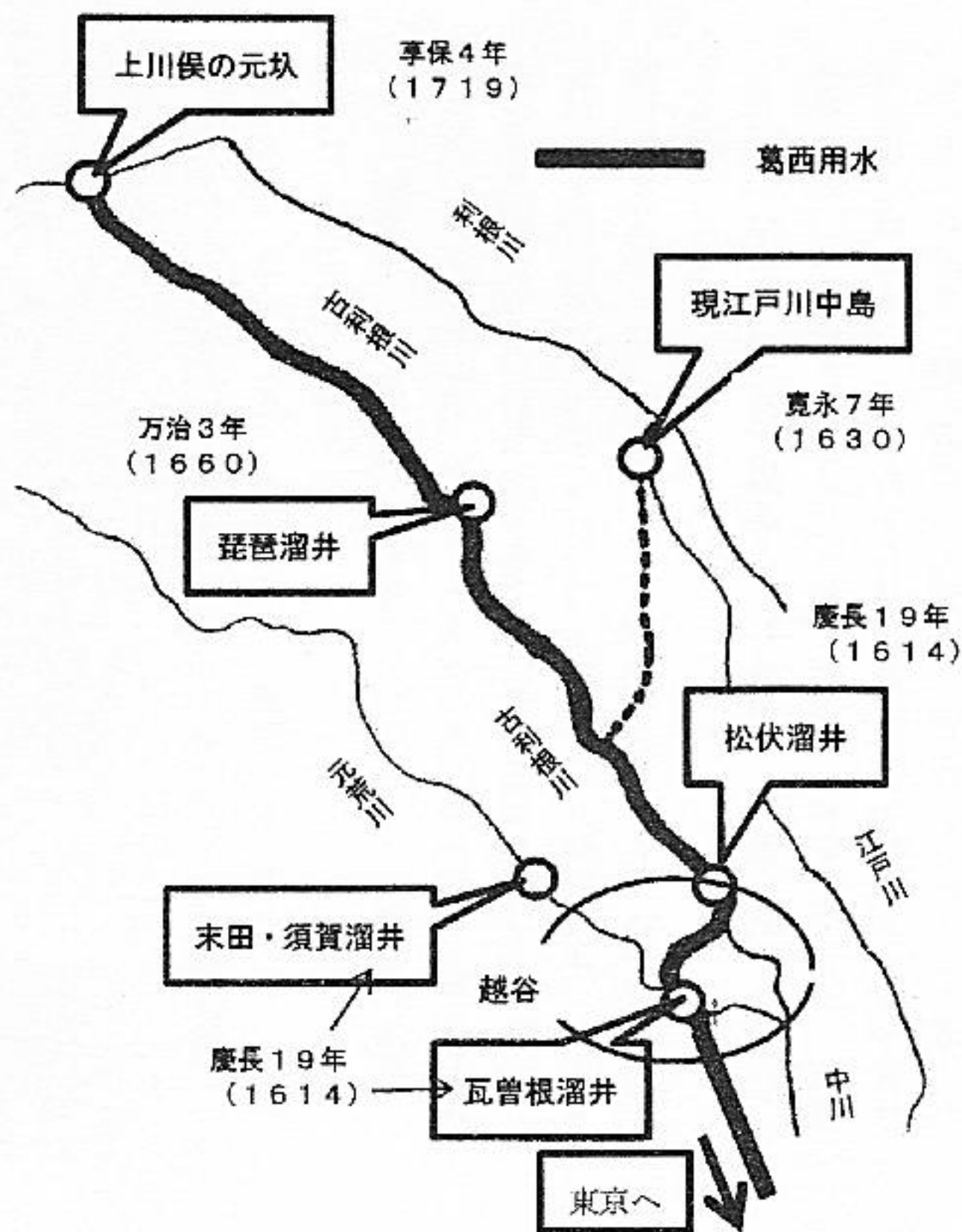
日光街道



● 葛西用水の全容

寛永七年（一六三〇）、水源を庄内領中島の利根川（現在の江戸川）に求め、用水路を開削して古利根川に導入し、松伏堰で堰止めて溜井とし、寛永十八年（一六四一）頃、逆川（鷲後用水）によって元荒川に接続し瓦曾根溜井に送水した。

・この中島用水も宝永元年（一七〇四）の大洪水によって庄内領内水路が埋没してしまったため、享保四年（一七一九）に利根川の川俣の幸手領用水以樋を増設して、琵琶溜井を通して古利根川に水を入れ、瓦曾根溜井に導入した。



● 逆川逆止堰

逆川は名の通り、元荒川の増水によりたびたび逆流したようだ。そこで大正13年、元荒川支派川改修事業（大正末期から昭和初期にかけて埼玉県が実施した「13河川の改修」実質的には古利根川・元荒川・綾瀬川」の改修事業）の一環で元荒川との合流点に逆流防水堰が設けられた。ゲートは木製の角落し3門だが現存しない。

ついでに、この事業の主眼であった「堰や水門によって阻害されていた舟運の便を復活させる計画」は、綾瀬川・新河岸川を除き実施されていない。

● 越谷高校ボート部

・ボート部のある高校は、県内で10校、越谷市内では1校。ボートには1人乗り、2人乗り5人乗りがある。エンジンがないので免許はいらない。

・元荒川葛西用水の両方で練習している。水が少ない時は、戸出のボート練習場で、練習している。隣の八潮高校は中川で練習している。

・東高校はボートではなく、カヌーです。ボート少年部に属し、団体、インターハイに出場し、上位に入賞した経歴があります。

・現在部員は、30名です。新年度になると、50名ぐらいになります。

3 寺橋

●寺橋の由来

・元荒川の呼称は寛永六年（一六二九）徳川幕府の治水対策で荒川本流の入間川筋（和田吉野川）への瀬替以後のことであり、かつては古荒川ともよばれた。

・この瀬替えによる流量不足を補うため中島用水（現葛西用水）が開発されたと思われ、それにともなうて、天嶽寺前を開削し流路とする河川改修がおこなわれた。この改修は越ヶ谷御殿地から花田村（現花田地区）を迂回して小林村（現東越谷地区）に至る曲流した流れを直流に改修し、瓦曾根溜井までの通水の便を図ったものである。

・文明十年（一四七八）開基とされる越ヶ谷天嶽寺前のこの河川改修に伴い、遮断された旧越ヶ谷町内との通行利便のため、天嶽寺第四世城譽上人（正親町天皇第三皇子）おおぎまろの発願により橋が架けられた。以後この橋を地元の人達は、親しみを込めて「寺橋」と呼び現在に至っている。

・この「寺橋」付近は流れもおだやかで昭和初頭の頃から、地元青年団による子供たちの水練場（水泳場）が開設され、大いに賑わい、越ヶ谷の夏の風物詩ともなっていたが、昭和三十四年にコンクリート製の橋に架け替った（以前は木橋）頃より、地域開発に伴う環境の変化と併せて水質の悪化が著しく、時代の流れと共にその姿は消えた。

・平成十五年十一月宮前橋（旧称寺橋）の新設竣工を機に元荒川

の環境保全と「寺橋」の名の歴史的意義を顕彰し、この碑を建立する。

平成十八年九月吉日

「寺橋」由来の碑建立之会



4 建長板碑

けんちやういたひ

●建長元年版碑

・御殿町の元荒川畔（元は元荒川寺橋の西先二又路の所にあつた）に、越谷市内で最古・最大の板碑がある。板碑中央下部に「建長元年（一二四九）己酉」の銘がある。

・所在地 四四五〇―四 番地先 元荒川堤防上

・形態 青石塔婆 高一五五cm・幅五六cm・厚九cm

下部は欠けており願主・願文は不明

全長二m以上と推定される

・刻銘 種子 梵字 阿弥陀如来 建長元年己酉（一二四九）

・文化財 越谷市有形文化財 昭和四五年三月二十五日

・越谷市域の板碑の幅の平均は二〇cm前後であるから、これほどの板碑をつくる経済的基礎をもつ豪族が、この地に住んでいたことがわかる。日本最古の板碑が嘉禄三年（一二二七）で、建長元年の板碑は、それより二二年後に造立された初期板碑である。板碑は鎌倉期から室町・戦国期までの四百年間につくられ、江戸時代に入ると急に遺品がなくなる。

・板碑とは、死者の冥福のため、あるいは自分の死後の菩提（逆修）のためにたてられた。地方により石材は異なる。埼玉周辺地域では、武蔵型板碑と呼ばれる薄く板状にはがれる「緑泥片岩」がつかわれている。この石は荒川上流の秩父地方に多く産し、加工しやすい。又、運搬上川周辺に造立されされたものと思われる。



建長板碑

・武蔵型板碑は、現在約四万基あり、埼玉県内（全国一）で約二万基をかぞえる。越谷市内では一三四基（昭和五十年）が確認されている。日本最大の板碑は秩父長瀬にある「野上下郷石板碑」で高さ約五m・幅約一mあり、応安二年（二三六九）のものである。

・板碑は、中世の仏教信仰、豪族や武士の展開、河川交通の有り方をさぐる資料の一つである。



板碑に並ぶ稲荷神社

5 越ヶ谷御殿跡

こしがやこてんあと

●越ヶ谷御殿跡

・天下に君臨した徳川家康は、慶長七年（一六〇二）奥州道を公道に指定し、越ヶ谷宿を取立てるなど、道中の整備を進めた。そして慶長九年（一六〇四）には増林にあつた御茶屋御殿（今も「城ノ上橋」「城ノ上小学校」などの名がある）を越ヶ谷郷の土豪会田出羽資久の敷地内に移し、壮大な御殿を建造した。これを「越ヶ谷御殿」と称した。

・家康は、しばしばこの越ヶ谷御殿に宿泊し、民情視察を兼ねた鷹狩りを重ねていた。殊に慶長十八年（一六一三）には三度も訪れ、一日に鶴を一九羽も捕捉したとある。また、二代将軍秀忠も、同じく越ヶ谷御殿を訪れ、一ヶ月にわたり宿泊し鷹狩に興じていた。

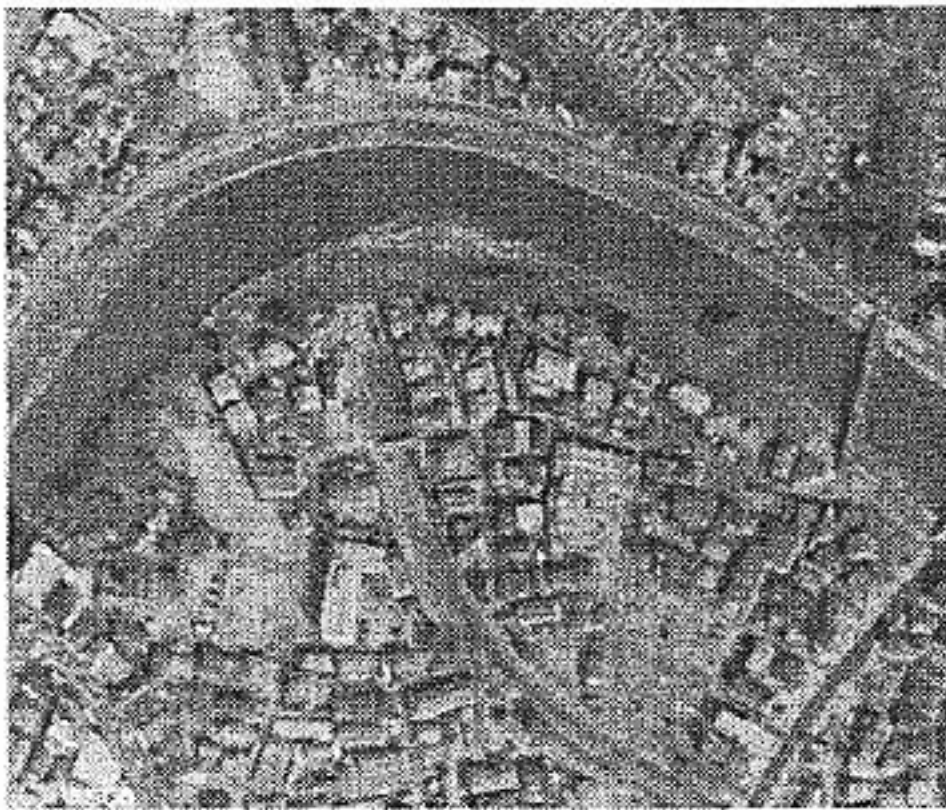
・しかし明暦三年（一六五七）一月の江戸大火（振袖火事）で江戸城が全焼したため、急速越ヶ谷御殿を解体し江戸に運び、江戸城を再建した。

・越ヶ谷住民は御殿が江戸に移されてからも、将軍の別荘があつた所として、この地を「御殿町」と称し今に至っている。その面積は凡そ六町歩（約六ヘクタール）である。

・現在では御殿の面影を偲ばせるものは残っていないが、「御殿町」という地名にその名を残し越ヶ谷の人々に語り継がれている。

●御殿場発祥の地

・静岡県「御殿場」は「御殿」の地名の発祥の地。元和元年（一六一五）、家康公が駿府に隠居し、江戸を往来する際の宿泊施設として建てられる（跡地は現吾妻神社）。しかし翌年、没したため一度も使用されなかった。



越ヶ谷御殿の敷地跡を上空から見る。（現御殿町）



越ヶ谷御殿跡石碑
真下は逆川の伏越

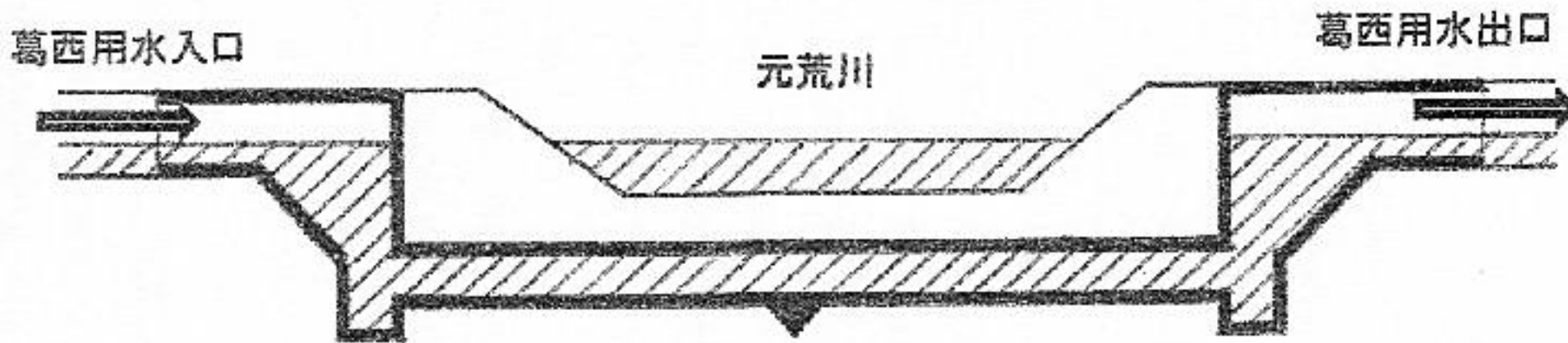
●元荒川と逆川の分離工事

昭和二十二年九月十五日のカスリーン台風は関東の南部に大雨を降らせた。それは利根川水系の決壊を生じ、濁流は南下し十八日には桜井・新方・増林などの新方領に達した。越谷地域だけでも逆川で二か所、元荒川で一〇か所、古利根川で一八か所、新方川で一か所に及んだ。

この大災害を機に、国・自治体では水害予防対策を講じてきたが、昭和三十一年より、元荒川の川底を二mほど浚渫（深くする）するなどと共に、逆川と元荒川の用排水を分離することとなった。しかし実施するまでは、地元町村からは、分離すると取水能力が低下するなどの抵抗があったが、昭和三十五年から工事が進められた。

まず両川を分離する中土手の築堤、越ヶ谷御殿町から柳町を縦断する逆川の新河道造成から始められ、昭和四十一年の春、元荒川の下をくぐる全長一〇〇mに及ぶ、当時埼玉県ではもつとも長い逆川のサイフォン（伏越樋）工事が完成した。

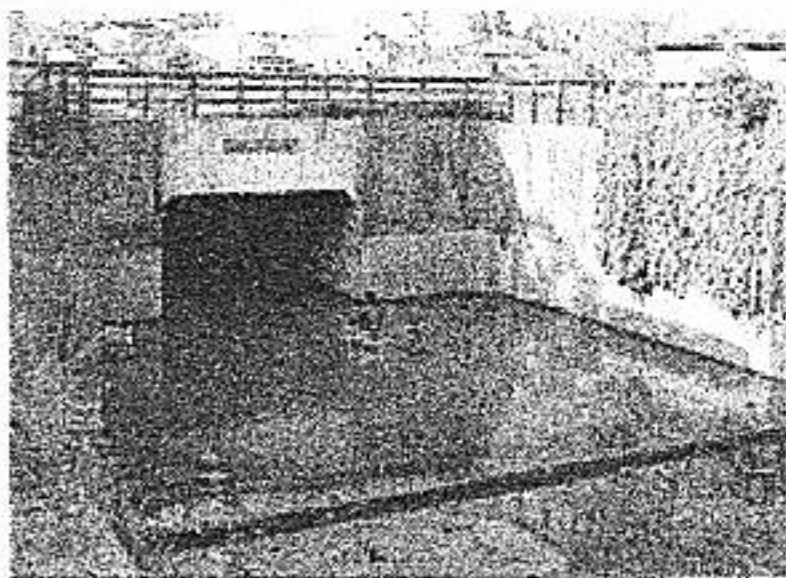
ここに元荒川と葛西用水が完全に分離され、同時に大沢地蔵橋地先から瓦曾根溜井までの景観はまったく一新し、越谷市の景勝地となった。



●逆川逆止堰

逆川は名の通り、元荒川の増水によりたびたび逆流したようだ。そこで大正一三年、元荒川支派川改修事業（大正末期から昭和初期にかけて埼玉県が実施した「一三河川の改修」実質的には古利根川・元荒川・綾瀬川）の改修の一環で元荒川との合流点に逆流防水堰が設けられた。ゲートは木製の角落し三門だが現存しない。

ついでに、この事業の主眼であった「堰や水門によって阻害されていた舟運の便を復活させる計画」は、綾瀬川・新河岸川を除き実施されていない。



7 大沢の地蔵橋地蔵尊

じぞうはしじぞうさん

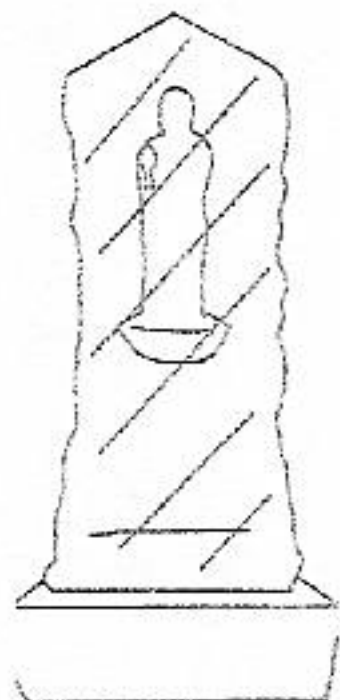
・現在、地蔵橋の東詰南側に石の地蔵尊を安置している地蔵堂がある。もとは逆川を隔てた反対側、つまり地蔵橋の西詰にあった。今でもこの地蔵橋地蔵尊への信仰が続いている。毎月二十三日（地蔵菩薩の縁日の前日）は、地蔵堂に地元の人々が集まって念仏を行っている。特に八月二十三日は大祭である。

・地蔵橋の西詰北側にある屋号が「松葉屋」と呼ばれてきた松沢家は、最近まで「団子屋」の愛称で親しまれてきた。江戸時代は猿島街道（野田街道）に面したこの地で茶店を営んでいたと推定される。

・この店に、地蔵橋地蔵尊のいわれが刻まれた年代不詳の縦二九・五cm、横七七・五cmの板が保管してある。以前は、この店の前に掲げられていたという。（別掲）



地蔵堂



地蔵尊（石仏）
年号不詳。一説に、元文二年（一七三七）以前より安産・子育ての地蔵として信仰されてきたとされているが定かではない。

地蔵橋地蔵尊のいわれが刻まれた板

地蔵橋の地蔵様は、煙管から煙管に火を貸して、中の煙草を人にとられるのに似ている。それは、地蔵様があつて地蔵橋があるのに（橋の方は人々によく知られていても）地蔵様のことをよく知らない者が多い。

今は、誰ともなく「古い昔の由来がある」と言うだけでである。橋のためとに住む自分は、宿場の長老に尋ねてみた。長老が言うには、「昔、地蔵にゆかりのある子孫が石仏の下に宝物をうめたとのことだが、あわれにも線香の煙がけぶるようなもので、雲か霞のように消え失せたと伝え聞いている。」との事だった。

この話を聞いて、自分は幾人かの人達に地蔵様のことを話し、寄進を願って新たにお堂を建てた。仏も「やつと供養してもらえぬ時期がきた」と喜んでいることと思う。それというのも人々の信仰心が足りないばかりに、ご利益にあやかれず、自ら迷い疑い、ついには生業さえおろそかにする。

昔、浅草の観音様は、隅田川に沈んでいたのが、漁師の網にかかつて世に出る事によって今では有名になっている。また、大相模の不動様は、行脚僧の笈（背に負う箱）に背負われていたものが安置され、靈験あらたかなものとなっている。

大石を彫って尊い仏像としても（信仰心が足りなければ）それだけでは草木が紅葉するような恵みはないのと同じである。こここの通り道の人達は、何べんとなく合掌しなさい。そうすれば、いつの時代も地蔵様が慈悲の心で私たちを見てくださるし、病を治し、子孫の末永い繁栄を祈って下さることだろう。

● 四本坊
しほんぱう

末田須賀堰から流れる須賀用水はこの場所で逆川の下を流れている。これを「四本坊」といい、正式には「伏越竜坊」という。

昭和二十二年の「カスリン台風」時に、この「四本坊」で逆川が破堤し、大沢町のほとんどが水没した。いわくつきの場所である。

● 大沢七ツ池

(1) 内池

(2) 外池

(3) 浅間池

(4) 嘉右衛門池

(5) 八郎兵衛池

百姓「八郎兵衛」の名から

御水帳 六反四畝貳歩(約二千坪)

(6) 蜷池

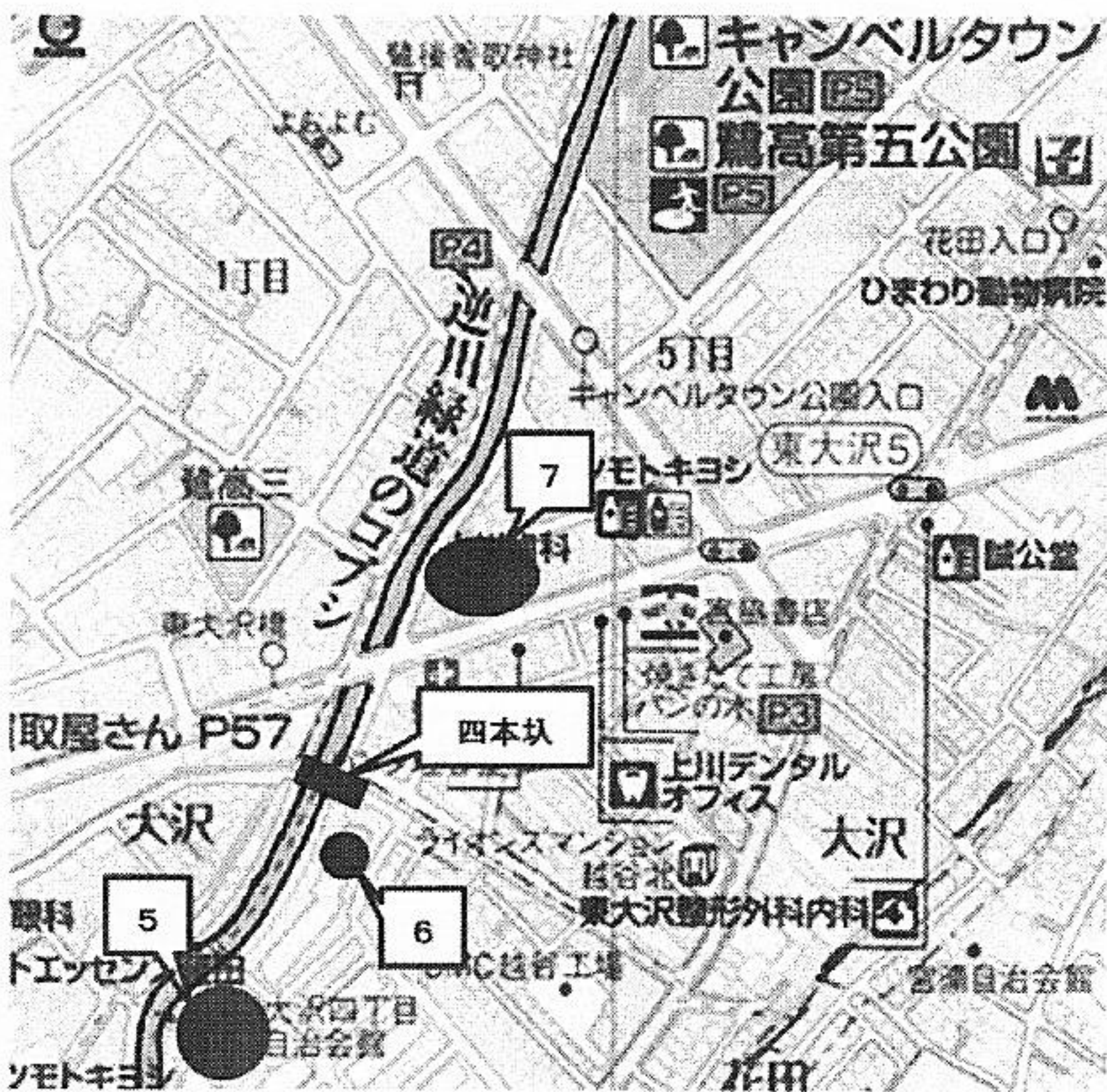
わずか五〜六畝(150〜180坪)

小さい池故「蜷池」

(7) 観音坊池

約四反歩(千二百坪)

昔、弘福院の観音堂があった故「観音坊池」



8 キャンベルタウン公園

●姉妹都市キャンベルタウン

・提携年月日 昭和五九年（一九八四）

・提携の経緯

越谷市は兼ねてより地球の反対側に位置する都市、つまり南半球で同じ位置にある都市との交流を考えていたが、昭和五六年、オーストラリアの都市との交流をすすめたい旨、オーストラリアの政府機関である豪日交流基金に申し入れた。翌昭和五七年四月、同基金主催のシンポジウムにおいて、同基金より姉妹都市の候補として出席していたキャンベルタウン市を紹介された。そして、会議に出席していたキャンベルタウン市の元市長が越谷を親善訪問、越谷市と交流をすすめたい旨を表明した。両市は地理的条件や市の特色が似かよっており、またお互いの市長などが相互に相手都市を訪問し友好が深まり、姉妹都市を締結するに至った。



越谷市・キャンベルタウン市
姉妹都市提携20周年記念時計
2004年5月20日

9 伏越（新方川）

●伏越（新方川）

新方川定使野橋の直上流では、逆川（葛西用水）が新方川の下を伏越で横断している。ここは元々は大吉伏越（煉瓦造）と呼ばれ、新方川が逆川の下を潜って横断していたのだが、新方川の規模が大きくなりすぎたために、現在の形態へと改められた。

●定使

近世において名主・庄屋のもとにあつて村民や他村の村役人との連絡にあたるもの。村民を呼び集めたり、領主から触書・廻状類を隣村に持ち運ぶのが主要な役目で、村入用の中から給料を受ける。

●定使野

定使が住んでいた所、あるいは、それら使用人の食料をとる耕地をさしたようである。

●新方川（千間堀）

千間堀とも呼ばれ、堀の長さが千間あったからではなく、長い堀を千と表現した。

東武伊勢崎線の鉄橋部は狭窄部となっていて、川幅は約一〇mしかない。この鉄橋は明治三二年に建設され、煉瓦造りである。新方川（当時は千間堀）に残る最も古い橋だ。ここにだけ明治時代の千間堀の川幅が残っている。なお、千間台（せんげんだい）という地名は、千間堀に由来すると思われる。

●葛西用水逆川堤防切割騒動 (P2のX印)

- ・日照りの時 用水の流量をめぐっての水論
- ・洪水の時、自村の耕地の水害から守るため、対岸の堤防を切り割る争論

・安政6年(1859)7月、連日の暴風雨で各川が異常な高水となり、とくに逆川は元荒川と古利根川の両押水にはさまれて水位は上昇し、ついに大吉村の堤防が押し流され、大吉・向畑地域に流入した。そして両地域の者たちが対岸(増林側)の堤を切り割って流れを増林側に流し、大吉方面の被害を少なくしようとした。これを目撃した増林川が殺気立ち一触即発の状況になった。この水論に対し、新方領内に多くの土地を持つ松伏村の名主石川民部が増林側に謝罪して大事に至らなかった。しかしこのあと大吉側が誠意を示さなかったため増林側5ヶ村は連署をもって奉行所に訴訟を起こしている。この結果は不明であるが、結局示談内済の措置がとられたと見られる。

●東映のロケ『霧の街』新方橋で行われる

東映佐々木監督の天然色映画『霧の街』のロケが四日午前十時から南埼玉谷町大吉の新方橋で行われた。

柳につつじ、満々とたたえた逆川、深川木場になぞらえた内川材木店と、全ては天然色には絶好の場で深川芸者に紛する星美智子のアデ姿に見物人もみとれていた。

昭和三十二年五月五日 産経新聞

10 水神様

●定使野公園

公園内の一角に水神様の祠がある。

11 大吉調整池

●大吉調整池

・越谷市大吉地区にある、中央が、すり鉢状の大吉調整池。池のふたつの中島の形は、シラコバトの飛ぶ姿を模している。広さは10.3ヘクタールもあり、中央が水生植物に覆われていて、野鳥の天国にもなっている。

・台風や集中豪雨のときに水を蓄える役目をもっている。「越流堤形式」といって、川(新方川)の水量がある一定以上になると、水を取り込み、40万トンもの水を貯めることができる。川の水位が下がるとポンプで川へ排水する。浸水被害をなくすため、河川激甚災害対策特別緊急業としては、全国で初めて調整池が設けられた。

・周囲には1周1200mの遊歩道があり、健康器具なども設置されている。



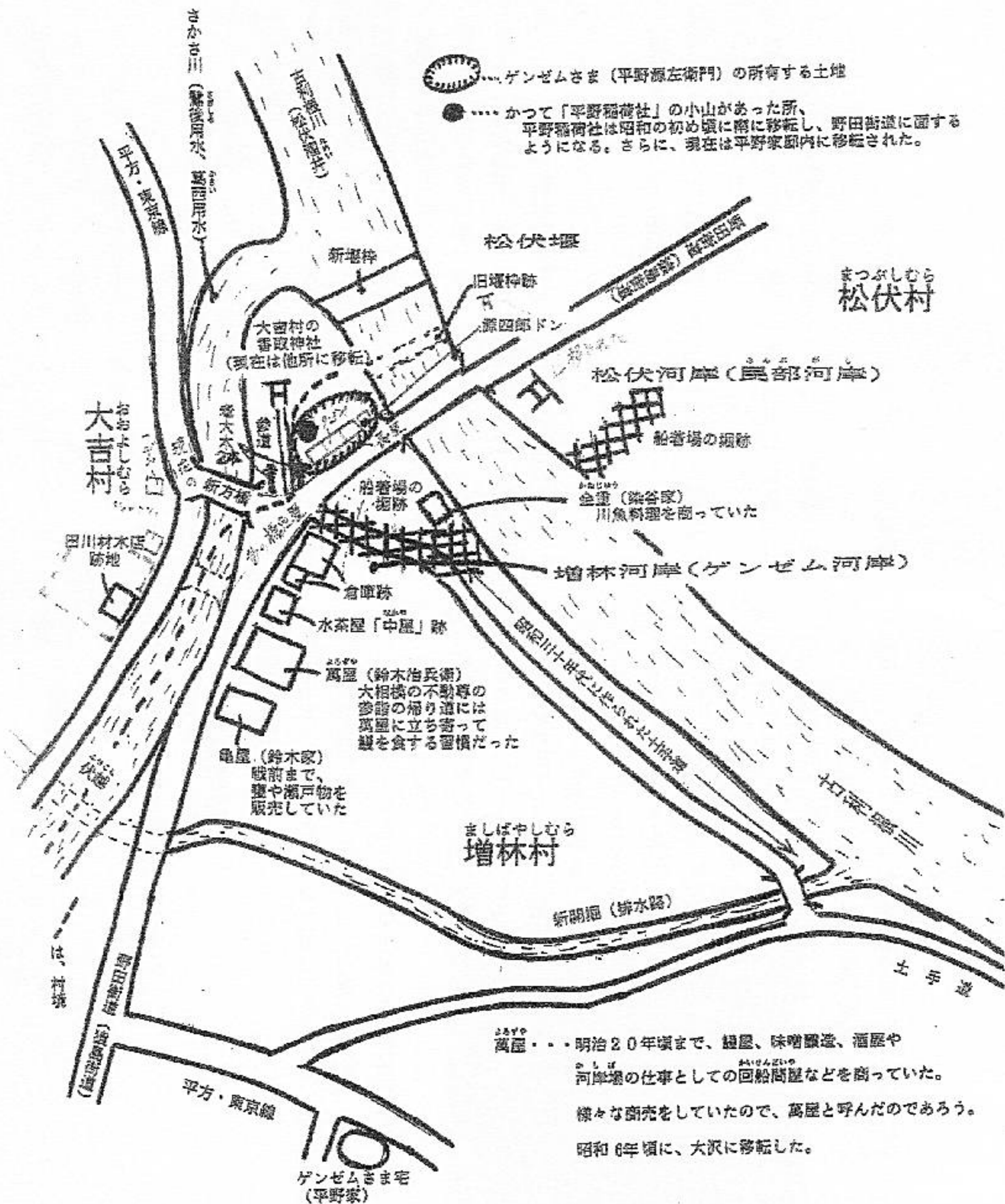
松伏溜井と増林河岸の跡



.....ゲンゼムさま（平野源左衛門）の所有する土地



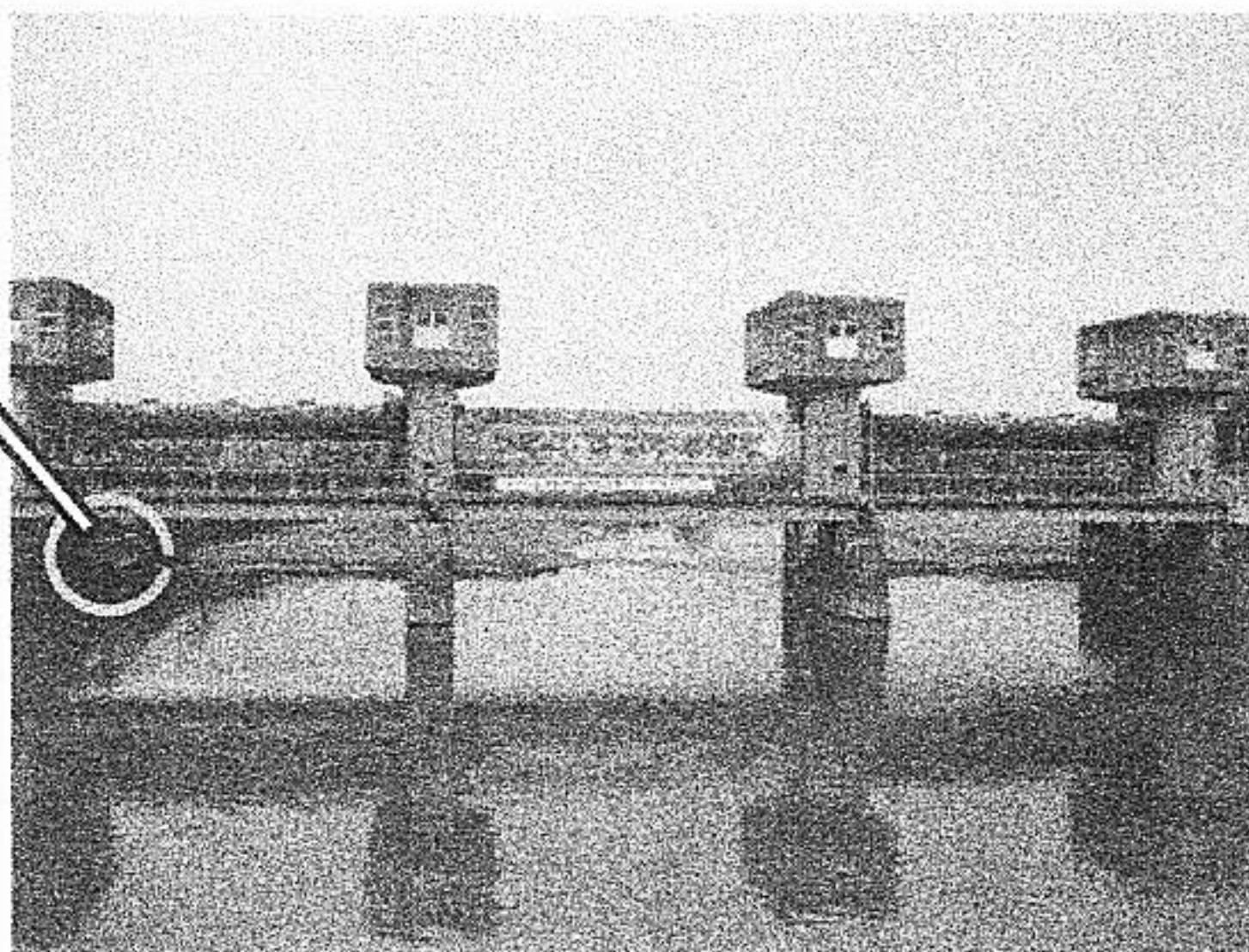
.....かつて「平野稲荷社」の小山があった所、平野稲荷社は昭和の初め頃に南に移転し、野田街道に面するようになる。さらに、現在は平野家邸内に移転された。



萬屋・・・明治20年頃まで、鰻屋、味噌醸造、酒屋や河岸場の仕事としての回船問屋などを商っていた。様々な商売をしていたので、萬屋と呼んだのであろう。昭和8年頃に、大沢に移転した。

東増林河岸については、越谷市教育委員会発行の「川のあるまち第10号」の『増林河岸場の跡』（鈴木進志著）に詳しい。

●松伏溜井



逆川香口

古利根川下流側寿橋より堰の向こう「松伏溜井」をのぞむ

●増林河岸の跡（鈴木進志氏記の抜粋・他）

- ・野田街道と古利根川が交差する寿橋から越谷寄りに凡そ50m程の街道の北側に老大木が日本たつている（平成11年現在・今は切株）。ここはかつては大吉の香取神宮の参道入口だった所である。
- ・昔はこの大木前の道路を挟んで反対側に入江が街道家並みの裏側を迂回して道路際まで入込んでいた。この水路はかつての古利根川水運の増林河岸（現左衛門河岸）の船着場の跡だったという。
- ・松伏堰の水門が開くと堰の下流が増水してこの水路まで入り込んだ。この時は水流でこの沼地は活気づき、漁師の川舟も入って溪流されていたが、戦前の頃、普段は全く寂れた所になっていた。
- ・「越谷市史」には、明治中頃の調査によると、古利根川の川底が既に浅くなっていたことや、粕壁からの高瀬舟（途中に立ち寄る河岸場、河岸場で物資が積み込まれてきたので、地元では合船あいはねと呼ばれた）でのこの河岸場への出入りが年間三十五回、米麦三千八百二十俵であった。
- ・昔はこの河岸は源左衛門河岸ともいわれた。河岸場沿道には源左衛門の敷地が多く、付近住民は地借をしていた。現在でもこの地主を「ゲンゼム様」と呼んでいる。
- ・寛延元年（一七四八）の記録「大吉村香取神社前敷地出入裁許」香取神社前の敷地を源左衛門が河岸場に使用している旨を、大吉村徳蔵寺・百姓たちが役所へ訴訟に及んだ。結果、昔から河岸場に使用している敷地は神社まで及んでいないとの採決になった。

●地名の由来

○○村は江戸時代の村名

現大相模地区 (旧大相模村)

大聖寺の寺伝によると、天平勝宝二年(七五〇)、良弁高僧が相模国の大山で一本の樺びやまきの木から二体の不動尊を刻み、その一体がこの地に祀られたので大山の大相模と呼ばれたという。

西方村 (現西方村・現相模町)

中世の郡名大相模郷のうち西の方にあたる地ということで名付けられたようです。

現蒲生地区 (旧蒲生村)

瓦曾根村 (現瓦曾根)

瓦曾根は、川原曾根かわらそねとも書かれ、元荒川の河原にあたる砂地からおこった名とみられる。

現越谷地区 (旧越ヶ谷町)

越ヶ谷町 (現越ヶ谷・現柳町・現御殿町)

コシガヤの地名は、武蔵野台地のふもと(腰こし越)にある低地(谷)、腰谷こしや越谷と呼ばれたと考えられる。

現大沢地区 (旧大沢町)

大沢町 (現大沢・現東大沢)

もとのこの辺りは一面の沼沢地で、ことに大小一七か所の池や沼があつたので、大きな沢、つまり大沢と呼ばれたといわれる。また一説には、長元七年(一〇三四)という年に、大沢の住人深野源三郎という人が富士山に登り、大沢という滝から、影向えいこう

石という石を持ち帰って浅間神社をお祀りしたので、この地を大沢といったといわれる。

現増林地区 (旧増林村)

増林村 (現増林)

増林の増は「マシ」といい、めでたい字なのでこれを林の上につけたと思われる。現在増を「マス」とも呼んでいるが、江戸時代の道しるべには「ましばやし」とあるので「マシ」が正しいようである。

小林村 (現東越谷)

明治十二年の郡制のとき、頭に東の字がつけられた。それまでは小林村といった。小林の地名は、林があつた地から名付けられたようで、「小」は意味のないものと思われる。

花田村 (現花田)

寛永六年(一六二九)以前、元荒川は天狗の鼻のように曲流していた。それで天狗の鼻の形をした耕地、すなわち鼻田と名付け、いつしか花田と書かれるようになったという。また一説には越ヶ谷の鼻の先にあたる地から鼻田と名付けたとも。

現新方地区 (旧新方村)

この地域が古い頃は新方庄、江戸時代には新方領と呼ばれていたことから名付けられた。

大吉村 (現大吉)

大吉はもと大芦おおよしとも書かれ、芦あしの茂った地から名付けられたようである。